桜美林大学　大学教育開発センター
Newsletter
No.06
J.F.Oberlin Faculty Development Center Newsletter
2011年7月15日

Contents ▶
1 第二ステージを迎えた大学教育開発センター　2 授業実践の現場から④:「最大多数の最大理解」を求めて―「金融基礎力」教育の試み―　3 授業実践の現場から⑤:演奏体験への道のり　4 2010年度 活動報告　5 自己点検・評価委員会の活動について②

1 第二ステージを迎えた大学教育開発センター

副学長　大越　孝

３月11日に発生した東日本大震災は地震、津波、原発事故のいずれも、甚大な被害をもたらした。被害の少なかった本学でも、計画停電や交通機関の乱れに４月中は翻弄された。その結果、５月からの授業開始を余儀なくされた。在校生１名が帰省先で津波の犠牲になったことは、痛ましい限りである。また、高等教育研究の第一人者であった馬越　徹先生が2011年４月に急逝された。大学教育開発センター設立時、馬越先生には多大なご尽力をいただいた。ここに、謹んで哀悼の意を表すと共にご冥福をお祈り申し上げる。

大学教育開発センターは、2007年12月から2008年４月まで５回の準備委員会を経て、2008年５月28日第１回大学教育開発センター会議開催をもって産声を上げた。大学教育開発センターに「調査・研究部門」、「FD・SD部門」、「情報評価・分析部門」を設置した。３部門とも当初は手探りの状態であったがその後、活動が軌道に乗り始めた。FD・SD開催、NewsletterやFact Bookの発行を通して情報発信を行った結果、大学教育開発センターは全学に認知される存在となった。FD・SDも着実に実績を上げ各教育組織および事務組織内でも活発に行われるようになっている。NewsletterやFact Bookの発行によって情報発信と情報開示が浸透し、成績評価のあり方等の点検と改善に向けた全学的な取り組みも進んでいる。

学外に目を向けると、中央教育審議会の新たな指針あるいは、第二クールに入った認証評価制度の大規模な改編等が次々と打ち出されている。各大学は、これまで以上に教育の質向上が求められている。すなわち、大学の教育力向上に資するため、自己点検と自己評価を基にした改善が重要である。そのためには根拠となるエビデンスも求められる。

第二ステージを迎えた大学教育開発センターの役割は、桜美林大学の理念・目的・教育目標の学内への周知と達成度を検証する役割を担っている。その検証に当たっては、エビデンスで評価することを学内へ徹底する必要がある。

大学設置基準は法令で定められた高等教育の最低基準である。本学が目指すべき独自の教育基盤と達成に向けたガイドラインを学内へ示す使命がある。加えて、恒常的にPDCAサイクルが機能するように点検した上で自己点検と自己評価するシステムの構築が課題である。

本学の教育の質保証を一層堅固なものにするためには、大学教育開発センターが核となって、各教育組織の長所を評価し、また、問題点や課題に対する改善策の提案やサポートが責務である。結果として、大学全体の教育改善に寄与することができる。また、私学助成の観点から捉えれば、大学教育開発センターが今後３部門の活動を充実させ、教育改革や教育の質保証の推進役となり学内外に公表することが、社会に対するアカウンタビリティにもつながる。第二ステージを迎えた大学教育開発センターの役割は益々大きくなる。

2 授業実践の現場から④：「最大多数の最大理解」を求めて―「金融基礎力」教育の試み―

ビジネスマネジメント学群 教授　平田　潤

経済全般に深く関わっている金融であるが、大学で金融を学ぶ場合、依然として少なくない学生が敬遠しがちである。その背景には以下３つのボトルネックの存在が推測される。

A. 難しい金融専門用語（ファイナンス・リテラシー）が頻出する

B. 複雑・難解な金融理論が前面に出されて、興味を失う

C. 苦手な数学や計算、各種モデルが多用され、そこで学習意欲が滞る。

本学での金融入門講座「ファイナンス入門」履修学生は、約100名前後（2011年）の規模である。これまでの本学授業アンケートや、授業経験の現場から得られる結果、学生は、

① 基礎的な学力（計算能力、経済キーワード知識など）不足が見られることが、履修・学習への参入障壁となっている。

② 学生は授業内容に、「分かり易さ」と「体系性」を同時に求めている、

③ 金融科目への履修者の学習意欲と理解度は、概ね比例して上昇していく傾向がある、

と見られる。そこで筆者は初学者・入門者向けに上記に対応できる新たな**「金融基礎教育」**の必要性を痛感するに至った。初等・中等教育の段階では、科目の必修・選択上の問題や、受験による制約もあって、学生が「経済・金融の仕組み」を体系的に学ぶ機会は必ずしも多くない。一方ビジネスではもちろん、社会人になると金融行動が日常化する中で、様々な金融商品を判断・選択したり自分の金融資産を護る力が求められ、自己責任が厳しく要求されることになる。従って将来、社会人・ビジネスパーソンとして、金融に関わる際に必要十分なレベルの「金融力」（知識・経験など）を獲得する基盤は、今般、日本において「全入時代」になりつつある「大学教育」での重要な課題と考えられよう。

そこで筆者は、金融分野で大学生が社会人になるまでに修得不可欠であると考えられる内容を、学士課程で身につけるべき学習成果（学士力）も展望して、新たに**「金融基礎力」**として、設計・提示した。

「金融基礎力」とは、知識と知識活用力の両輪が含まれ、初等・中等教育での金融教育と、ビジネス・社会人の金融行動に必要な金融知識・経験レベルとの間の、「架け橋」的役割を果たすもので、大学時代に是非身に付けて欲しい内容である。

「金融基礎力」とは、主に

- **金融の仕組みを理解する、**
- **基礎的な金融用語を身につける、（ファイナンス・リテラシー）**
- **リスクとリターンとの関係を把握する**
- **金融システム（金融機関・市場・政策などの枠組み）を理解する、**
- **自己判断で選択し、結果に責任を持つ**

から構成される。

「金融基礎力」を学生が効果的に学び修得するために、筆者は上記５項目を具体的に展開したテキストを作成した。

① 教科書の主な内容を、できるだけビジュアル化（金融概念やシステムをパワーポイントによる図式化）し、わかり易い説明を可能とした。

② 特に、やや難解な金融システム・枠組みの説明について、プレゼンテーションを工夫し、理解度向上を試みた。

（ア）アニメ調の学生二人による対話形式のイントロダクション

（イ）パワーポイント（スライド）による視覚効果

（ウ）コンパクトな図表による、理解度／関心の向上効果

（エ）わかり易い例題表示とプレゼンにより、数式や計算へのアレルギー減少

筆者は、2009年度以降、本学の授業評価アンケート、及び独自の履修者アンケートを実施して、「履修前」と「履修後」について、改善効果の検証・分析を行った。

その結果、テキストの効果的使用により、上記金融学習におけるA～Cのボトルネック（用語、理論、計算へのアレルギー）はかなり解消し、**「金融基礎力プログラム」**の展開によって、学生の理解度も着実に向上したと思われる。

3 授業実践の現場から⑤：演奏体験への道のり

総合文化学群 教授　横山　正子

クラシック音楽演奏に取り組む若者は、日本のみならずヨーロッパでも減少の傾向にある。ドイツにおいても、たとえばメンデルスゾーンが設立したライプツィヒ音楽院は現在演劇を取り入れ、「フェリックス・メンデルスゾーン＝バルトルディ音楽演劇学校」に姿を変え、音楽のコースにはポピュラー音楽専攻も設けている。若者のクラシック離れが拡大していることが見て取れる。

専攻演習で、次のような質問を学生に投げかけてみた。「日本中でクラシック音楽を愛好する人の割合は、きっと数％にすぎないだろう。逆にJポップに親しんでいる人はかなりの割合にのぼるだろう。しかし、愛好してはいなくてもバッハやモーツァルトの名前を知らない人はほとんどいないと言ってよい。100年後はどうだろうか？ バッハやモーツァルトの名前は依然として多くの人が知っているだろう。しかしそのころ、現在人気のあるJポップ歌手の名前をどのくらいの人が知っているだろうか？」このディレンマには学生たちも首をかしげた。大作曲家の作品は多くの現代人にとって身近なものとはいえないが、その名前には親しんでいる。逆に言えば、大作曲家の偉大な名は永遠だが、その作品は日常生活とは縁がない。音楽はダウンロードにより手軽に聴かれ、オーディオ装置は机の上のPCで十分な時代においては、なによりも身近な音楽がクローズアップされるのが当然のなりゆきであろう。クラシック音楽の視聴者が減れば、演奏したいと思い立つきっかけももちろん減っていく。何十年もこつこつと練習を重ね、技術を磨きつつひとり作品と向き合い、孤独な時間を過ごす「クラシック音楽演奏」に取り組もうとする者が減少していくのはやむをえぬ流れなのかもしれない。

それでも大学は学生たちに、その地味な作業を通して得られる演奏のよろこびを伝えていこうとしている。言葉を変えれば、演奏するにはそこに至るまでの地味な作業が必要だということを教え、その尊さを示すことである。2011年3月5日、総合文化学群は総合企画室の協力を得て東京オペラシティで「桜美林音楽祭」を開催した。プログラムはモーツァルト「魔笛」序曲に始まり、ピアノ協奏曲KV.488、ヘンデル「メサイア」抜粋、サン＝サーンス「交響曲第三番オルガン付き」という多彩なものであった。学生オーケストラと賛助メンバー、音楽教員、学生と教職員から成る合唱団が参加した。準備の期間オーケストラの学生たちは難曲に苦戦し、また大規模ホールで公演するためのステージ運営業務がいかにハードなものであるかを、身をもって知ることになった。さらに、それらを乗り越えたときの達成感も。時代を超えて輝きを失わない名曲に自らが関わる体験は若者の意識を変えるほどの力を持っている。クラシック音楽が遠いものとなっていく現代にあってこそ、その体験を得るための道のりを粘り強く彼らに示唆していきたいものである。

4 2010年度 活動報告

5/12 第8回センター会議
第9回情報評価・分析（IR）部門会議
5/14 第9回FD・SD部門会議
7/15 桜美林大学 大学教育開発センター Newsletter No.04発行
7/27 第5回 調査・研究開発部門・キャリア開発センター共催公開研究会
9/13 第8回調査・研究開発部門会議
11/19 第10回FD・SD部門会議
1/15 桜美林大学 大学教育開発センター Newsletter No.05発行
1/26 第5回大学教育開発センター学内シンポジウム
3/31 『大学教育開発センター年報 第3号』発行
3/31 『桜美林大学 FactBook 2010』発行

5 自己点検・評価委員会の活動について②

2009年7月に本学自己点検・評価企画委員会を立ち上げ、認証評価と本学の対応に関する企画立案の作業を開始しました。2010年6月に「桜美林大学自己点検・評価委員会」を立ち上げ、「大学基準協会」の認証評価を受ける準備に入りました。この作業を契機に、本学におけるPDCAサイクルへの恒常的システム構築に向けて、「自己点検・評価報告書2010」の作成を進めておりましたが、3月１１日の東日本大震災の影響もあり、2010年度末の刊行予定から遅れてしまいました。しかしながら、全学的な支援を受けたこともあり、6月29日の第6回自己点検・評価委員会において最終チェックを経て刊行の運びとなりましたことをお知らせ申し上げます。

今後の活動について、事業計画に若干の修正が加わりましたのでお知らせ申し上げます。5月24日の第5回自己点検・評価委員会において、委員長（学長）よりの提案として、当初予定していた大学基準協会による認証評価に先駆けて、先ず「日本高等教育評価機構」による認証評価を受けることが提案され、この案が委員会において決定されました。

この決定を受け、認証評価作業チームが結成され、完成した「自己点検・評価報告書2010」を基に、日本高等教育評価機構の認証評価（2011年11月受審予定）を受けるための「自己点検・評価報告書2011」の執筆に着手しています。もちろん、10月には自己点検・評価委員会の点検と承認を得る必要があります。認証評価作業チームメンバーは以下の通りですが、全学を挙げてのプロジェクトとなりますので、今年度5月1日付けでの大学基礎データの収集等、引き続き関係各位のご協力を宜しくお願い申し上げます。

認証評価作業チームメンバー（敬称略）

【自己点検・評価委員会作業部会】
武村　秀雄　大学教育開発センター
橋爪　孝夫　大学教育開発センター
尾上　　聡　監査事務局
錦織　　徹　キャリア開発センター
市川　　文　国際学生支援課

【作業部会ワーキングチーム】
池田　壮志　教育支援課
潮木　史生　経理課
梅本　勝敏　経営企画室
矢倉摩衣子　入試広報センター
石田　彩恵　入試広報センター

【アドバイザー】
小池　一夫　大学院
鳥居　　聖　四谷キャンパス事務室
古川　健二　教育支援課

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター
〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758　桜美林大学 其中館 1 階 101　TEL.042-797-6724（内 3250）　FAX.042-797-6398
E-mail：fdcenter@obirin.ac.jp　Web：http://www.obirin.ac.jp/ri/fdcenter/